トップの視点

医療法人英然会 里見医院 理事長 里見 隆彦氏

介護療養型病床をはじめ個々人の状態と要望に応じた介護施設で、小規模施設ならではの迅速な対応と良質の介護サービスを提供する診療所の理事長里見隆彦氏にお話を伺った。

現在の医療法人英然会は、戦後まだ間もない昭和24年5月、父、里見元彦により、中津市下宮永の地で、里見内科小児科医院として開設されました。昭和58年3月、私の帰郷に伴い、現在地の中央町に移転し、内科小児科医院の標榜のまま診療所を継承しました。

医大に在学当時、6年生の授業は殆どが臨床実習で、内科や外科や小児科など各科を回りながら、同時に卒業後の医局（専門科）選びも兼ねていて、迷いながらも結局、消去法で父と同じ内科を選択しました。入局後は当初より開業医を志向して、2年間の研修医を経て消化管研究室に入り、主として内視鏡診断学を研鑽しました。同時に開業医としての初期一次医療に対応できるよう小児の患者さんも積極的に診てきました。

諸々の事情、状況により、医局在籍7年半の後、これも消去法といっては語弊があるかもしれませんが、結局前述しましたように、昭和58年に帰郷し父の医院を継承する運びとなりました。開業時は、父も健在で往診を分担してもらい、主に私が外来診療を担当していました。当初、私は小児科医と思われていたふしもあり、夜間など子どもの急患や電話でおちおち眠れない日々が数年続きました。現在は市民病院を始め小児科の夜間診療に支障はないようですが…。

その後平成元年より医療法人化し、英然会里見医院としましたが、いずれにしても内科開業医は家庭医（ホームドクター）として、多くは風邪症候群類似の初発症状として発症する、さまざまな病気の初期一次医療に当たることであり、また高血圧症や糖尿病や脂質異常症など、いわゆる生活習慣病といわれる慢性疾患の加療や健康相談、そしてインフルエンザを始め種々の感染症の予防接種や治療、また学校医、産業医としての保健指導など、地域のかかりつけ医としての役割も担っています。

また、近年の高齢化に伴い、かかりつけ高齢者の訪問診療による在宅医療も含め、介護やリハビリによる生活支援や健康維持、増進も、家庭医としての重要な務めとなっています。

そのような観点も踏まえ、平成10年よりデイケア（現在は通所リハビリテーション）と訪問看護施設を増設し、介護保険の始まる平成12年より介護療養型病床（17床）、訪問介護および居宅介護支援事業も開始しました。

平成15年にはいわゆるグループホーム（認知症対応型共同生活介護施設、18床）の併設を行い、また本年3月より住宅型有料老人ホーム（19室）『シニアホーム・睦み』を隣接地に設立することができました。そして来年3月にはデイサービスとショートステイ、それに訪問ヘルパー事業を併せ持つ、小規模多機能型居宅介護施設『ケアホーム・里の手』を近接地に開設させていただく計画です。

以上の診療所機能と介護施設サービス、通所介護および居宅介護サービス機能などをそれぞれ補完、総合すると、小規模ながら殆どの要介護者の方や要支援者の方などの予防介護も含め、ご要望に応じた対応、対処が可能となります。

どの施設も小規模ですが、逆に小規模ゆえに家庭的で、それぞれ個人の状態と要望に応じた、良質でより行き届いた介護サービスの提供が行えるものと確信し、またそのように努めているところです。

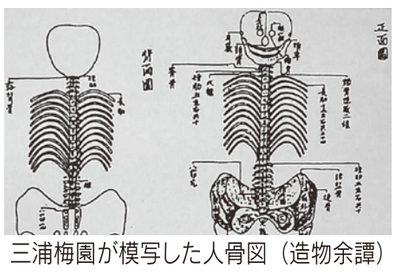
グループホーム・み里

シニアホーム・睦み（住宅型有料老人ホーム）

中津 蘭学とパイオニア精神

4 日本最初の人骨図と根来家

特定医療法人
川嶌整形外科病院
理事長
川嶌　眞人氏



三浦梅園が模写した人骨図（造物余譚）

日本で最初の人骨図が中津の村上医家史料館に展示されている。安永10年（1781）、中津を訪れた杵築藩富永村の医師で、日本のヘーゲルとも呼ばれる哲学者・三浦梅園は、漢学の恩師である藤田敬所（墓が合元寺にある）を訪ねた際に、友人の医師で、中津藩医の根来東麟宅を訪問した。その時に東麟の父親で、京都の眼科医であった根来東叔（1698～1755）が描いた人骨図を見せられ、その実証精神に感動して、この図を模写し、『造物余譚』の中に掲載している。

根来の名前の由来は和歌山県那賀郡岩出町の根来寺である。根来寺は平安末期に覚鑁（かくばん）が高野山上に大伝法院を開創したのに始まり、鎌倉後期以来、現在地で発展した新義真言宗の総本山である。戦国時代末期には最盛期を迎え、太子堂などの伽藍を核に、三千もの子院が立ち並んでいたという。同じ那賀郡にある華岡青洲の春林軒を調査した際に訪れたところ、今はその栄華を示す建物が僅かに残っているのみである。種子島に伝来した鉄砲は紀州の津田監物によって根来寺の杉ノ坊に伝えられた。根来の鉄砲集団は、しばしば秀吉軍を悩ませたと言われているが、そのため秀吉軍に徹底的に焼き討ちにされたことにより、伽藍の数が少なくなったということであった。

空海が唐に渡った時に眼病に罹り、このため眼病の治療法を秘法として学んだ。秘法とは焼針を用いて行うもので、薬剤調合の時は加持祈祷を合わせて行うと効果がさらに良くなるという。その後、根来寺の僧侶がこの秘法を代々引き継ぎ、福本宥賢（ゆうけん）、湯川東庵、東益、根来東源（1640～1703）へと受け継がれた。東源は大阪で眼科を開業して有名になった、根来家の初代ともいえる人である。その娘・俊女が養子に迎えたのが、出張清秀の次男・東悦である。そして東悦の子が根来東叔（1698～1755）である。東叔は京都で眼科を営んでいた。

東叔は白内障の手術の経験から、眼球内部の構造をあらわす模型図を作製し、白内障は眼球の中央から起こる疾患、即ち白内障中障解（寛保2年1742年）を著すなど、解剖に大きな関心を持っていた。享保17年（1732）、奈良で火刑に処せられた二人の男性（金柑長兵衛と中衆茂兵衛）の遺骨が、埋葬されることなく、長い年月の間、地上（空気中）に晒されていたのを見つけ、それを手にとり、研究して写生した。寛保元年（1741）、東叔はこの研究を『人身連骨真形図』と題する一書にまとめて、家伝とした。東叔は遺骨から多くのことを学び、それを記録した。「古来膝蓋骨の説有り。今これを見るに有ることなし。知らず。果たして有るや否や。余はひそかに思う。股骨の起頭甚だ大にして膝蓋の形を有す。因って以て別骨ありとなすか」と述べているように、膝蓋骨ひとつにしても細かく実証的に研究し、従来の説を検討する科学的な精神をもっていた。

日本医史学会の小川鼎三元理事長は「この記録は山脇東洋の解剖よりも13年前につくられ、験屍はそのさらに九年前に行われた。観臓ではないが梅園のうごとく、確かに本邦験屍の先駆である」と、そのパイオニア精神を評価している。根来東叔は宝歴5年（1755）4月12日、58歳で死去、大徳寺清泉寺（三玄院）に葬られている。

中津藩は当時から優秀な医師を全国からヘッドハントしていたが、根来東叔の子東麟は幼名を行直といい、享保16年（1731）7月2日、山城に生まれた。明和2年（1765）7月、中津藩奥平侯から本道御医師250石として召し出され、天明3年（1783）には姫様御用掛りとなって、八千代姫の大病を治し、褒美をいただいた。三浦梅園より3歳年長で、中津へ来た梅園をよく自宅へ招いていた。梅園は、根来東麟を〝翁〟と呼んで敬意を払っている。天明元年（1781）4月、東麟は東叔の描いた連骨図を梅園にも見せ、梅園は手早くこれを模写し、その勢いをかりて、『造物余譚』を一気に書き上げ、編集を終えた。

根来家は代々この図を伝えていた。その子孫は文政2年（1819）の村上玄水の人体解剖の際にも立ち会い医師として名を連ねていたが、その末裔の方々もいつの時代にか中津から去り私たちはご子孫の行方を捜していた。吉富町にある天仲寺山の東腹には根来家の墓が多数残されており、毎年墓参りされている。

1995年5月、福岡県築上郡の吉富町文化財協議会の会長、山本初男氏からご子孫の根来正輝氏を紹介され、松山均氏とともに色々とお話を伺った結果、前述のような根来家の歴史が判明した。

連骨図の所蔵者は日本医史学会の重鎮（副理事長）で、吉富製薬にも勤めておられた京都の宗田一氏が、この図を所蔵されていることを知り、中津で一度展示させていただくことを相談していたが、1998年宗田氏が亡くなられた。そのために一万点以上におよぶ膨大な史料を整理することを、登し子夫人から依頼されていた京都の医学史研究家・石原理年氏に、連骨図を発見して下さるように依頼していたが、約束通り、連骨図が発見され、筆者のもとに送られてきた。早速、1999年9月24日から村上医家史料館にて委託展示することになった。この日に合わせて、根来家のあった新博多町の市営駐車場において、連骨図の説明会が〝キャラバンなかつ〟の主催で行われることになっていたが、当日、中津を襲った台風のために翌日に変更されて、筆者が根来家の由来を、そして松山均氏が連骨図に書かれている文章の大略を解説した。その後、皆で村上医家史料館を訪れて連骨図を拝観し、夜には中津城で盛大に催された月見の会に参列した。京都から登し子夫人を妹さんとともにお招きし、〝キャラバンなかつ〟の今吉次郎氏が人力車に乗せたりして喜んでいただいた。

前東大教授、京大教授（人文科学研究所所長）を務められ退職後、中津に在住され、我々の漢文研究の大師匠でもある福永光司先生が、教育委員会の依頼で、連骨図に書き込まれた漢文をすべて解読して下さったので、後の研究者のために、村上医家史料館に展示している。蘭学も解剖学も無い時代に、山脇東洋の日本最初の人体解剖（1754年）に先立つこと13年前に実証精神とパイオニア精神をもって挑戦した東叔の心意気が伝わってくる。

『温故創新』という言葉がある。古いものを訪ね、研究し、良いものは残し、古いものを活かして新しいものを創造するという精神である。賢者は歴史から学ぶという。中津に〝日本最初の人骨図〟があることに誇りをもって、東日本大震災と政治経済の混迷という閉塞状況を打破する必要を感じる今日この頃である。

参考文献
一、川嶌眞人：『根来東麟と根来家について』　日本医事新報 3817巻、59～60、1997年
二、川嶌眞人：『中津藩蘭学の光芒』　西日本臨床医学研究所 中津　2001年
三、福島義一：眼科史の『窓』74～194、『眼科学史の窓』 出版会、徳島市
四、宗田一：『日本医療文化史』　思文閣出版　1989年
五、酒井シズ：『日本の医療史』　東京書籍　1982年

里見医院（介護療養型病床）
通所リハビリ・いきいきクラブ
訪問看護ステーション・ふる里
居宅介護支援ステーション・里見
ヘルパーステーション・さとみ
グループホーム・み里
シニアホーム・睦み（住宅型有料老人ホーム）
家事サポート・さとみ

内科
胃腸科
小児科
医療法人 英然会
里見医院

理事長
里見隆彦
〒871-0024 中津市中央町1丁目8番36号
TEL 0979-24-1251
FAX 0979-26-0405